



### サイクル サッカー 世界選手権 大会出場

8月9日、杉谷嘉紀さん（早子町）が市役所を訪れ、11月にオーストリアで行われる世界選手権大会出場を北川市長に報告しました。

サイクルサッカーは、競技専用の自転車に乗ってボールを扱い、サッカーのように点を取り合うスポーツで、1チーム2人によって屋内で行います。

杉谷さんは「一戦でも多く勝利して、リーグ昇格を目指したい」と話しました。



### 長寿者を訪ね、お祝い

「敬老月間」の始まった9月1日、北川市長が今年107歳を迎えた江口カツさんの入所する有料老人ホーム「ぼぷら」（三井が丘一丁目）を訪問し、長寿を祝う記念品を贈呈しました。

江口さんは市内で二番目の高齢者で、今も冗談を言って家族を笑わせたり、趣味の書道を楽しんだり。市長から記念品を渡されるとにっこりしていました。ほかの100歳以上の長寿者5人にも記念品が手渡されました。

また、男性で最高齢の横田義雄さん（102歳、太秦緑が丘）も訪ね、祝福しました。



### 東アジアリトルシニア野球大会優勝 全49チームの頂点に

9月6日、寝屋川リトルシニアの中学生20人が市役所を訪れ、8月17日に宮崎県で行われた東アジアリトルシニア野球大会で優勝したことを北川市長に報告しました。

主将の重留壮真さんは「チーム全員が一つとなり、優勝できました」と笑顔で話しました。



### ねやがわ若者会議を開催

8月10日、市内在住・在職・在学などの中学生以上30歳未満の参加者65人が、日頃感じている市に対する思いなどについて、活発な意見交換を行いました。

今回は「ごみの減量」について意見を出し合い、議論の中で「はちかづきちゃんが掃除やりサイクルをPRする」や「SNSを使い、ごみをおしゃれなアートにして発信する」など、若者の視点からの意見が飛び交いました。

会議での意見は、報告書として取りまとめて、公表する予定です。





## 空手 国民体育大会出場

9月5日、溝口誠さん（春日町）が市役所を訪れ、9月30日から愛媛県で行われる国民体育大会の空手競技に出場することを北川市長に報告しました。

溝口さんは出場に当たって「国体は2回目の出場になるが、今回は優勝を目指したい。また、チャンスがあれば東京オリンピックに出場したい」と力強く話しました。



## 田んぼに鮮やかアート

成田南町の農園に今年も幅約60メートル、奥行き約23メートルの「田んぼアート」が出現しました。緑のもち米と黒紫の古代米「紫稻」を使い、相撲の力士に「ネヤガワ」「サイコー！」の文字をあしらったデザインがくっきり。市出身の豪栄道・宇良の両関取がモチーフです。

都市化が進む寝屋川で農業の大切さを発信している南保次さんが平成25年から毎年、隣接する有料老人ホーム「ぼふら」や摂南大学、地域住民と協力して取り組んでいます。ぼふらではアートがよく見える施設屋上を10月28日（土）までの午前9時30分～午後4時に開放しています。問い合わせは、ぼふら（☎831・8383）へ。



## 友好都市・和歌山県すさみ町の子どもたちとスポーツ交流

8月5日～7日、市の子どもたち45人が友好都市の和歌山県すさみ町を訪れ、スポーツで交流を深めました。

市とすさみ町のスポーツ少年団が行ったもので、両市町の小学生が、すさみ町内の各会場に分かれて野球・サッカーで熱戦を繰り広げました。



## 空手少女、全国へ

8月4日、市立神田小学校2年生の西川温さんが市役所を訪れ、8月に東京で開催される全国大会への出場を北川市長に報告しました。

全国大会に向けて、西川さんは「優勝したい」と意気込みを語りました。

# ふるさとねやがわ

## 「寝屋川で歌うのは

## ちよつと気恥ずかしい」

フォークシンガー 中川 五郎さん

1960年代後半、府立寝屋川高校在学中に活動を始めた中川五郎さん（68歳）。日本のフォークソングの草分け時代から活躍し、今なお東京を拠点に全国で年間200回ものライブ公演を開いて、音楽評論などの活動もしていま

す。故郷での本格的なライブは、この7月にアルカスホールで開いたのが初めてだったそうです。慌ただしいリハーサルの合間、楽屋に伺いました。

になって、歌詞も半分くらい変えられまして……。ともかく、あちこちのコンサートで歌うようになるきっかけになった歌ではありました」。

高校時代のエピソードに、3年生の8月の補習授業中、配られたプリントの裏に受験生の「地獄のような」生活を描いた歌詞を書き、それが後に日本のフォークソングの先駆者、高石ともやさんが歌って大ヒットした「受験生ブルース」になったという話があります。

文学賞を受賞しました。そのお蔭で、2005年に彼の全集を訳出して中川さんもメディアの取材を受ける機会が増えました。中川さんにとってディランは、フォークソングを歌い始めた頃から聴き続け、今も音楽と向き合うときに欠かすことができない重要な存在だそうです。

当時、既に注目される歌手だった高石さんとは、その年の春休みに知り合い、コンサートに連れて行ってもらう間柄になっていました。「実は（アメリカのミュージシャン）ボブ・ディランの『炭鉱町のブルース』という暗い調子の曲に、受験生のつらさを重ねてつづった替え歌でした。それが明るいメロデー

いわゆる文学者ではない、ポピュラー音楽のミュージシャンへの授賞は論議を呼びましたが、「スウェーデンアカデミーの発表をみると、単に歌詞を詩としてみるのではなく、メロデーや声を含む歌の全体を評価したことが分かります。『文学』を広い豊かな意味で捉えた、素晴らしい決定でした」と歓迎しています。

郡元町で生まれ、市立第五小学校・第三中学校に通った生粋の寝屋川育ち。少年時代、古い街並みの自宅周辺と、住宅開発が進んでいく西側の地域との対比が印象的だったと言います。「古くからの村のイメージがあって、あの頃は好きじゃなかった」と若者らしい反発もあったそうです。ライブの日、「たまたま故郷ですつと公演していなかったもので、ちよつと気恥ずかしい。でも小学校や中学校で一緒だったという人たちが来てくれて、懐かしい」と語りました。

50年前、訴えたいことがあったから歌い始めた中川さん。「今の社会の状況は、当時と同じように歌わなければいけないことがあると思います」。ライブ活動への意欲は衰えません。

